

怪談一夜草紙

岡本綺堂

青空文庫

一

お福さんという老女は語る。

わたくしのような年寄りに何か話せと仰しやつても、今どきのお若い方々のお耳に入れるような、珍しい変わったお話もございません。それでも長いあいだには、自分だけに珍らしいと思うようなことが無いでもございます。これもその一つでございます。

わたくしが十七の年——文久二年でございます。その頃、わたくしの家は本郷の千駄木坂下町、どなたも御存じの菊人形で名高い団子坂の下で、小さな酒屋を開いていました。昔はあの坂に団子を焼いて売る茶店があつたので、団子坂という名が残っているのだそうでございます。今日とは違ひまして、その頃の根津や駒込辺は随分さびしい所で、わたくし共の住んでいる坂下町には、小笠原様の大きいお屋敷と、妙蓮寺というお寺と、お旗本屋敷が七、八軒ありまして、そのほかは町屋まちやでございましたが、団子坂の近所には植木屋もあれば百姓の畑地もあるというようなわけで、今日の郊外よりも寂しいくらいでございます。

ました。

その妙蓮寺というお寺の前に、浅井宗右衛門という浪人のお武家が住んでいました。なんでも奥州の白河とか二本松とかの藩中であつたそうですが、何かの事で浪人して、七、八年前から江戸へ出て来て、親子ふたりでここに店借^{たなが}りをしていました。宗右衛門という人は、そのころ四十四、五で、御新造には先年死に別れたというので独身でした。ひとり息子の余一郎というのは二十歳^{はたち}ぐらいで、色の白い、おとなしやかな人でした。

浪人ですから、これという商売もないのですが、近所の子ども達をあつめて読み書きを教えたりして、いわば手習い師匠のようなことをしていました。勿論それだけでは活計^{たつき}が立ちそうもないのですが、いくらか貯えのある人とみえて、無事に七、八年を送っていました。お父さんは寢酒の一合ぐらいを毎晩欠かさずに飲んでいました。

この親子の人たちが初めてここへ越して来た時は、わたくしもまだ子供でしたから、委^{くわ}しいことはよく知りませんが、近所の者はこんな噂をしていたそうです。

「あの人たちも今に驚いて立ち退くだろう。」

それには子細のあることで、その家に住む人には何かの祟りがあるとかいうので、五、六年のあいだに十人ほども変わったそうです。なかには一と月も経たないうちに早々立ち

退いてしまった人もあるということでした。一体どんな祟りがあるのか、わたくしもよく知りませんが、ともかくも五、六年のあいだに、その家からお葬式が三度出たのは、わたくしも確かに知っています。浅井さんの親子もそれを承知で借りたのです。そんなわけですから、家賃はむろん廉やすかったに相違ありません。家賃の廉いのに惚れ込んで、あんな化け物屋敷のような家へ住み込んで、いくらお武家でも今に驚くだろうと、みんなが陰で噂をしていたのです。

「世の中に物の祟りなどのあろう筈がない。」と、宗右衛門という人は笑っていたそうです。尤もこの人は顔に黒あばたのある大柄の男で、見るから強そうな浪人でしたから、まったく物の祟りなどを恐れなかったのかも知れません。

論より証拠で、今に何事が起こるだろうと噂されながら、浅井さんの親子は平気でここに住み通していたのですから、悪い噂も自然に消えてしまつて、近所の人たちも安心して自分の子どもを稽古にやるようにもなつたのです。七年も八年も無事に住んでいる以上、まったく宗右衛門さんの言う通り、世のなかに物の祟りなどは無いのかも知れないと、わたくしの両親も時々話していました。

そうすると、今までの人達はなぜ無暗に立ち退いたのでしょうか。大かた近所の噂をきい

て、唯なんとなき氣味が悪くなつて、眼にも見えない影に嚇かされて、早々に逃げ出したのかも知れません。お葬式が三度出たのも、自然の廻り合わせかも知れません。今の人なら無論にそう考えるでしょう。昔の人もまあそんな風に考えてしまったのでございます。

浅井さんも最初は手習いの師匠だけでしたが、後には劍術も教えるようになりました。別に道場のようなものはないのですが、裏のあき地で野天稽古をするので、わたくし共もたびたび見に行つたことがあります。その頃は江戸ももう末で、世の中がだんだんに騒がしくなつて来たものですから、町人でも竹刀などを振りまわす者も出来て、浅井さんにお弟子入りをしている若い衆が十人ぐらゐはありました。

さてこれからが本文のお話でございます。最初に申し上げました文久二年、この年はお正月の元日に大雪が降りまして、それから毎日風が吹きつづけて、方々に火事がありました。正月の晦日には小石川指ヶ谷町から火事が出て、わたくし共の近所まで焼けて来ました。その春から上野の中堂が大修繕の工事に取りかかりましたので、お花見差止めというわけでもありませんでしたが、大抵は遠慮して上野のお花見には出ませんでした。向島にはお武家の乱暴が流行りまして、酔つたまぎれに拔身を振りまわす者が多いので、ここへも女子供はうかつに出られません。その上に辻斬りは流行り、押込みは多い。まことに物

騒な世のなかで、わたくし共のような若い者は何が何やら無我夢中で、唯々いやな世の中だと悸^{おび}え切っていました。

ところが、又そういう時節が勿怪^{もっけ}の幸いで、今日で申せば失業者の浪人達がいろいろの方面へ召し抱えられて、御扶持にあり付くことにもなりました。浅井さんもその一人で、一旦浪人した旧藩主のお屋敷へ帰参することになったので、お父さんも息子も大喜び、近所の人たちもお目出たいといって祝いました。

「就いては長年お世話になったお礼も申し上げたく、心ばかりの祝宴も開きたいと存ずるから、御迷惑でもお越しを願いたい。」

こう言つて、浅井さんはふだん懇意にしている近所の人たちを招待しました。家が広くないので、招待を二日に分けまして、最初の晩は近所の人達をあつめ、次の晩は剣術のお弟子たちを集めることにしたのです。わたくしの父も最初の晩に招かれまして、主人も満足、客も満足、みんながお目出たいを繰り返して、機嫌よく帰って来しました。

さてその次の晩に、不思議な事件が出来したのでございます。

それは五月なかばの暗い晩で、ときどきに細かい雨が降っていました。一方は高台で、近所には森が多いので、若葉の茂っているこの頃は、月夜でもずいぶん暗いのですから、こんな晩は猶更のことでございます。

浅井さんの家には十人ばかりの若い衆があつまりました。なにしろ親子ふたりの男世帯で、女の手がないのですから、こんな時にはお給仕にも困ります。そこで、近所のお豊さんお角さんという娘ふたりが手伝いを頼まれました、ゆうべも今夜も詰めていました。お料理は近所の仕出し屋から取り寄せたのですが、それでも十人からのお客ですから、お座敷と台所とを掛け持ちで、お豊さんもお角さんもなかなか忙がしかったです。

若い人達ばかりが集まったのですから、今夜は猶さら賑やかで、だんだんお酒が廻るにつれて、陽気な笑い声が表までも聞こえました。そのうちに主人の浅井さんがこんなことを言い出しました。

「月日は早いもので、わたしがここへ来てから足かけ八年になる。世間の噂では、この家には何かの祟りがあるという。それを承知で引き移って来たのであるが、その後一度も怪しいことはなかった。わたしも悴もこれという病気に罹ったこともなく、災難に出逢

ったこともなく、無事に年月を送って来た上に、今度は測らずも元の主人の屋敷へ帰参が叶うようになった。わたしに取ってはこんな目出たいことはない。最初に誰が言い出したのか知らないが、この家に祟りがあるなどというのは嘘の皮で、祟りどころか、かえって福の神が宿っているといっても好いくらいだ。」

浅井さんも目出たい席ではあり、今夜はいつもよりお酒を過ごしているので、自分の言ったことに間違いのなかったのを誇るように、声高々と笑いながら話しました。聴いている人達もみんな口を揃えて、仰せの通りと笑っていました。

これで無事に済めば、まったく仰せの通りですが、主人も客も面白そうに飲みつづけて、今夜もやがて四つ（午後十時）に近いかと思う頃に、裏口の戸をとんとんと軽く叩く音がきこえたので、座敷にお給仕をしていたお角さんが台所の方へ出て行きました。つづいて裏の戸を同じようにとんとんと軽く叩く音がきこえたので、今度は息子の余一郎さんが出て行きました。

裏も表もひっそりして、その後は物音もきこえません。お角さんも余一郎さんもそれぞれ帰って来ないので、他の人達も不思議に思つて、二、三人がばらばらと起つて表と裏へ出てみると、外は一寸さきも見えないような真つ暗闇で、そこらに人のいるような気配も

ないのです。いよいよ不思議に思つて、内から火をとつて出て見ましたが、やはり其処らに人の影は見えないのです。

「はて、どうしたのだろう。」

みんなも顔を見合わせました。初めに裏口から出たお角さん、次に表へ出た余一郎さん、どっちもその儘ゆくえ不明になつてしまつたのですから、みんなが不思議がるのも無理はありません。一体、裏と表の戸を叩いたのは誰でしょう。二人はどこへ行つたのでしょうか。この場合、そんな詮議をするよりも、まずその二人のゆくえを探す方が近道ですから、五、六人の若い衆が提灯を照らして裏と表へ駆け出しました。年の若い人達ではあり、ふだんから剣術でも習おうという人達ですから、小雨の降る暗いなかを皆んな急いで出かけたのです。出ては見たが、見当が付かない。思い思いに右と左へ分かれて、^{あて}的もなしに其処ら呼んで歩きました。

「お角さん……。お角さん……。」

「余一郎さん……。」

その声におどろかされて、近所の人たちも出て来ました。わたくしの店の者なども出て行つて、一緒になつて探し歩きましたが、二人のゆくえはどうしても判らないので、どの

人もただ不思議だ不思議だと言うばかりで、なんだか夢のような、狐にでも化かされたような、訳の判らないような心持になってしまったのでございます。

お角さんは町内の左官屋のひとり娘でした。お父さんの藤吉というのは相当に腕のある職人で、弟子ふたりと小僧ひとりを使いまわして、別に不自由もなく暮らしているのです。お角さんはことし十六で、浅井さんへ手習いの稽古に来ていた関係から、ゆうべも今夜も手伝いに来ていたのです。お母^{おっか}さんはお時といって、ふだんから病身の人でした。

不思議とはいいいながらも、こうなると誰の胸にも先ず浮かぶのは、余一郎さんとお角さんとの関係です。若い同士のあいだに何かの縁が結ばれていて、屋敷へ帰参が叶うことになれば、二人は逢うことが出来ない。万一、お国詰めにでもなれば一生の縁切れです。そこで、二人が相談して駄落ちをした。——と、まあ考えられるのですが、それならば今夜のような時を選ばずとも、もっと都合のいい機会^{おり}があつたろうと思われます。いかに年が若いといつても、二人ともに子供ではなし、駄落ちと決心した以上は相当の支度をして出る筈です。この雨のふる晩に、着替えの一枚も持たずに、どこへ飛び出したのでしょうか。

そう考えて来ると、二人の駄落ちも少しく理屈に合わないように思われます。さりとて、まさかに心中する程のこともありますまい。二人の家出を、別々に考えていいのか、一緒

に結び付けていいのか、それが第一の疑問です。もう一つの疑問は、裏口の戸を叩いたのは誰であるか、表の戸を叩いたのは誰であるか、それも一人の仕業か、別人の仕業か、一向に見当が付かないのでございます。

夜が明けても、二人は帰って来ませんので、騒ぎはいよいよ大きくなるばかりです。きょうも細かい雨が時々に降り出して、なんだか薄暗い陰気な日でした。

その日の午頃^{ひる}に、わたくしの店の若い者がこんなことを聞き出してきました。三崎町の大仙寺というお寺の納所^{なつしよ}が檀家の法要に呼ばれてかえる途中、丁度その時刻に坂下町を通りかかると、谷中の方角から十歳^{とお}か十一ぐらいの女の子が長い振袖を着て、折りからの小雨にそぼ濡れながら歩いて来るのに出逢いました。この夜ふけに、小さな女の子が何処へ行くのかと、振り返って見送っていると、その子のすがたは浅井さんの家のあたりで見えなくなってしまうたというのです。勿論、前にも申す通りの暗い晩ですから、その子のすがたが消えてしまったのか、闇に隠されてしまったのか、確かなことは判りません。納所の方でもそれほど不思議にも思わないで、そのまま行き過ぎてしまったのですが、けさになって浅井さんの一件を聞いて、もしやその女の子が戸を叩いたのではないかと言ひ出したのです。

若い者の報告を聞いて、わたくしの父は首をかしげていました。

「坊さんなぞというものは、とかくにそんな怪談めいたことを言いたがるものだからな。本当か嘘か判らない。」

しかしそれを聞いたのは、わたくしの店の者ばかりではないとみえて、その噂が忽ちに近所に拡がって、駈落ちの噂が一種の怪談に変わりました。

「やつぱりあの家には祟りがあつたのだ。今まで何事もなかったが、浅井さんがいよいよ立ち退くというまぎわになって、不思議の祟りが起こつたのだ。」

息子の余一郎さんはともあれ、他人のお角さんまでがどうして巻き添えを食つたのでしょうか。お角さんまでがなぜ祟られたのでしょうか。それが呑み込めない、わたくしの父はやはり強情を張っていました。父がいくら強情を張つたところで、二人がゆくえ不明になつたのは争われない事実で、駈落ちか怪談か、二つに一つと決めるよりほかはないのでございませう。

前後の事情から考えると、一途に駈落ちとも決められず、さりとて怪談も疑わしく、みんなもその判断に迷つてしまつたのです。

三

それに就いて、お父さんの浅井さんの意見はと訊ねますと、最初はなんにも判らぬと言っていました、しまいにこんなことを打ち明けたそうです。

「大仙寺の納所が見たという、年のころは十歳か十一で長い振袖を着た女の子——実はそれに就いて少しく心あたりが無いでもない。私がここへ引き移った日の夕がたに、それらしい女の子が裏口から内を覗いていたことがある。大かた近所の子供であろうと思つていたが、その後ここにそんな子のすがたを見かけたことはなかった。私もそれぎりで忘れていたが、今度の話で思い出した。納所が出逢つたという怪しい女の子は、どうもそれであるらしい。」

こうなると、確かに怪談です。お角さんのお父さんの藤吉は大事のひとり娘がゆくえ不明になったのですから、職人達と手分けをして、^{まなこ}気がい眼で心あたりを探しあるいて、明くる日のゆう方にがっかりして帰つて来ると、右の怪談です。可哀そうに、お父さんはいよいよがっかりして、顔の色も真つ蒼になつてしまいました。さなきだに病身の阿母^{おつか}さんはどつと床に就くという始末です。お角さんと一緒に働いていたお豊さんも、その話を

聴くと顫えあがつて、これも俄かに気分が悪くなつて寝込んでしまいました。雨のふる晩に、長い振袖を着た女の子が戸を叩きに来て、若い男と女とを誘い出して行つた——寄れば障ればその噂で、なんの祟りか知りませんが、浅井さんもうとうとう祟られたということに決まつてしまいました。今まで近所の評判もよく、殊に今度の帰参を祝つている最中に、こんな騒ぎが出来したのですから、町内の人たちも一層気の毒に思いましたが、こういう怪談になつては何とも手の着けようがありません。今まで広言を吐いていただけに、近所の手前面目ないと思つたのかも知れませんが、浅井さんは誰にも無断で、その晩のうちに何処へか立ち去りました。家財はそのままに残してあつて、机の上にこんな置き手紙がありました。

前略。このたびは意外の凶事出来、御町内中をさがせ申し候条、何とも申訳も無之候。取分けて藤吉どのには御氣の毒に存じ申候。就ては其後の詮議仕りたく存じ候え共、何分にも帰参の日限切迫いたし居り候まま、其意を得ず候こと残念至極に存じ候。少々の家財、そのままに捨置き申し候間、よろしく御取計い被下度候。早々。

浅井宗右衛門

五月十六日

御町内御中

今日と違いまして、その当時のことですから、お話はこれでおしまいです。しかし怪談の噂はなかなか消えないで、ゆうべも振袖を着た女の子を見た者があつたとか、どこの家の戸を叩かれたとか、いろいろのことを言い触らす者があるので、気の弱いわたくし共は日が暮れると外へも出られず、雨のふる晩などは小さくなって竦すくんでいる位でございます。その噂を聞き込んだのでしよう、それから四、五日の後に、岡つ引の親分が手先を連れて、この町内へ乗り込んで来ました。町内の人達から委くわしい話を聴き取って、その岡つ引は舌打ちをしました。

「畜生、風を食らつて高飛びしやあがつたな。」

だんだん聴いてみると、なんとまあ驚いたことには、浅井という人は浪人あがりの強盗だったのだそうです。これにはみんなも呆あっけ気に取りられました。そういえば浅井は余り人相のよくない人でしたが、息子の余一郎という人は色白のおとなしそうな顔をしていながら、親子連れで斬取り強盗を働いていたのかと思うと、実に二度びつくりでございました。全く人は見掛けに依らないものです。それでも余程上手に立ち廻っていたと見えて、その悪

事が久しく知れずにいたのですが、何かの事から足が付いて、この頃は自分達のからだが危くなつて来たので、親子相談の上で怪談を仕組んだらしいのです。

もとの屋敷へ帰参などは勿論うそで、夜逃げなどをしては人に怪まれると思つたからでしょうが、なぜそんな怪談を仕組んだのでしょうか。岡つ引の人達の鑑定では、おそらくお角さんをかどわかす手段であつたろうというのです。お角さんと余一郎と関係があつたか無かつたか判りませんが、もし関係があつたならば誘い出す方法は幾らもありましたろうから、多分は無関係で、行きがけの駄賃にお角さんかお豊さんかを引つ攫つて行つて、どこかの宿場女郎にでも売り飛ばすつもりであつたろうというのです。

裏口の戸を叩いたのは浅井の仲間か手下で、なに心なく出て行つたお角さんに さるぐつわ 猿轡でも嵌めて担ぎ出したのでしょうか。お豊さんの方は運よく助かつたわけです。余一郎までがなぜ出て行つたか判りませんが、お角さんを遠いところへ連れて行くのに、一人ではちつと手に余るので、その加勢に行つたのかも知れません。なにしろ唯の家出では詮議がやかましいので、こんな怪談めいた事を仕組んで、世間の人たちを迷わせようとしたのでしょうか。

大仙寺の納所がその晩に怪しい女の子を見たというので、これも寺社方の調べを受けま

した。納所がこんな事を言った為に、いよいよ怪談と決められてしまったわけですが、納所は、確かに見たというだけのこと、浅井の一件には何の係り合いもないことが判つて、そのまま無事に帰されました。したがって、その振袖の女の子の正体はわかりません。浅井も振袖の女の子の事などは最初から考えていなかったのでしょうか、そんな噂が広まったのを幸いに、当座の思いつきで、「実は引越しの日の夕がたに」などと、いよいよ物凄く持ち掛けたのでしょうか。今の人間ならば容易にその手に乗らないでしょうが、何といつても昔の人たちは正直であつたと見えます。

かえすがえすも気の毒なのはお角さんの親たちで、阿母^{おつか}さんはそれから一年ほど寝付いたままで、とうとう死んでしまいました。浅井親子はそれからどうしたか知りません。奥州筋で召捕られたとかいう噂もありましたが、確かなことは判りませんでした。それから三、四年の後に、お角さんは日光近所の宿場女郎に売られているという噂を聞きましたが、これも噂だけのことで、ほんとうの事は判りませんでした。

小説や芝居ならば、浅井親子の捕物や、お角さんの行く末や、いろいろの面白い場面があるのですが、実録は竜頭蛇尾とでも申しましようか、その結末がはっきりしないのが残念でございます。どうも御退屈さまで……。

青空文庫情報

底本：「綺堂随筆 江戸のことば」河出文庫、河出書房新社

2003（平成15）年6月20日初版発行

初出：「日曜報知 第四百十六號」

1933（昭和8）年3月12日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※「申候」と「申し候」の混在は、底本通りです。

入力：江村秀之

校正：noriko saito

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

怪談一夜草紙

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>